



TITLE:

シュンペーター帝国主義論序説

AUTHOR(S):

静田, 均

CITATION:

静田, 均. シュンペーター帝国主義論序説. 経済論叢 1957, 80(4): 398-413

ISSUE DATE:

1957-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/132573>

RIGHT:

經濟論叢

第八十卷 第四號

神戸正雄博士
八十歳祝賀
記念論文集

昭和三十二年十月

京都大學經濟學會

シュンペーター帝國主義論序説

静 田 均

一

帝國主義に関するシュンペーターの理論は、彼の論文『諸帝國主義の社会学』（“Zur Soziologie der Imperialismen”）によってほとんど餘すところなくその全貌を窺うことができる。この論文は、一九一八年から一九一九年にかけて二回にわたって、『社会科学および社会政策論集』（Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik Bd. 46）誌上に掲載されたものであるが、同じ一九一九年に独立の冊子として刊行された。わずか六〇ページの小篇にすぎないけれども、それが学界に投げかけた波紋はなかなか大きく、シュンペーターにとつても、ある意味で会心の労作であつたらしい。現に彼じしん作成した主要著作目録には、厳選の結果、代表作六點しかあげられていないが、その中にこの論文が加えられているところを見ても、思ひなかにすぎるものがあるう。シュンペーターはいうまでもなく経済学者として通っており、けつして専門の社会学者ではない。しかし彼の視野は、世のつねの経済学者よりはるかに広く、かつ高遠な展望をもつていた。それにしても業績の大部分はむしろ経済学に関するものであり、純然たる社会学の労作はそう多くはない。そのわずかな社会学的研究のうちで、とりわけ注目をあびたものは、ほかな

らぬ前記の帝国主義に関する論文である。

シュンペーターの帝国主義論は、これまでの多くの理論にくらべると、まったくユニークな存在である。ただし彼いぜんの学説といえ、ホブソンにしろ、新マルクス主義者たちにしろ、近代の帝国主義の根源を経済に、あるいは資本主義に見出そうとする点において、軌を一にし、いずれも『経済的帝国主義』の理論に属するといつてよいが、シュンペーターはむしろそうした傾向にあきたらず、それを強くしりぞけると同時に、該博な歴史的知識を駆使して、古代より現代におよぶ諸帝国主義を新しい視角から分析し、独得の社会学的基礎づけを試みようとする野心的な企図をもつものだからである。

最初ドイツ文で発表されたシュンペーターの論文は、近年になってようやく英訳が企てられ、スウィージイの解説つきで公刊された（“Imperialism and social classes”, translated by H. Norden, 1951）が、さらに最近には都留重人教授の手によってその邦語化が行われ、われわれにもいつそう親しみやすいものとなった（都留重人訳『シュンペーター『帝国主義と社会階級』昭和三十一年）。

スウィージイの語るところによると、帝国主義にかんするシュンペーターの関心は、最初はバウエル、ヒルファードイングなど新マルクス主義者たちの理論によって触発されたらしいが、たまたま第一次世界大戦の勃発は、シュンペーターにもっと立ち入った研究を志すにいたらしめた直接の機縁を提供したものとごときである。この見地からすると、シュンペーターの論文は二つの課題をもつと想定することができる。第一はバウエル、ヒルファードイング流の理論に対する批判的克服であり、第二は第一次世界大戦にいたる全時代に妥当し、かつ旧来の諸学説にとつてかわるだけの新しいがっちりした理論をうちだすということである。前者は彼の消極面を代表し、後者は彼

の積極面を代表するわけだ。

帝國主義に関する論文を発表してから、その死にいたるまでの約三〇年のあいだに、多産的なシュンペーターはいろいろの著書・論文をものしたが、とりわけ『資本主義・社会主義・民主主義』（一九四七年、増補第三版）の中である程度まで帝國主義の問題に触れている。しかし、別に新しい見解が追加されたわけではない、また旧説を根本的に修正した形跡も見当らない。ウインズローによると、晩年のシュンペーターは旧来の自説に満足せず、ひそかに修正と補強を意図していたということだが（Winslow, *The pattern of Imperialism*, 1948 pp. 235-6）、たとえそうだとしても、新しい構想が陽の目を見ずにおわつたことは、たしかである。それゆえ以下の考察では、主として『諸帝國主義の社会学』をとりあげることとし、他の労作には必要なかぎりにおいて闕説する程度にとどめようとおもう。なお本稿は、紙幅の関係からいわば序説的部分に範圍を限定し、本論的部分の考察は他の機会にゆづるほかなかった。一言おことわりして御容恕をこいたい。

二

シュンペーターの帝國主義論の特異性は、何よりもまずその定義づけのうちに端的に現われている。彼はいう、『帝國主義とはこれという限界なしに暴力的な膨脹をなしとげようとする国家の無目的な性向である』（第一章）と。膨脹が政治的支配領域の拡大を意味することは、何人にも明かであり、そのために暴力が行使され、征服とか侵略とか戦争とかいふ現象が不可避免的につきまとうことも理解に困難ではない。困難なのはむしろ彼が「無目的」といっているのは何を意味するか、という点にある。

シュンペーターによれば、民衆の『実質的・具体的な利益』によっても直接かつ明瞭に説明することができず、従つて膨脹それ自体のほかにこれぞという目的を見出しかねる場合をさす。すなわち『覇権』(“Vornachstellung”)とか『世界支配』(“Welt Herrschaft”)とかいう言葉によつて反映されているように、攻撃そのものを目的として絶えずそれを追及してやまない態度が、帝国主義の本質なのだ。『歴史はいろいろな国民ないし階級が、膨脹のために膨脹を求め、戦闘のために戦闘を求め、戦勝のために戦勝を求めたことを……われわれに語っている。このような戦争決意は、これを決行するに至らしめたどの口実をもつてしても、説明できぬものであり、またその時々になうした決意がめざしているように思われるなどの特定の目的をもつてしても、説明できぬものである。それは具体的な目的や理由からは全く独立した永続的な性向である』(同上)。

いかなる場合をもつて実質的・具体的利益があるといふのか。われわれはもう少し立入つてシュンペーターの説明を聴かなければならぬ。具体的利益は経済的な性質のものでありうる。例えば、関税障壁や交通上の障害によつて四周を包囲されたある国家が海への通路を得ようとして戦争に訴えるような場合がそれだ。しかし具体的な利害は、必ずしも経済的な性質のもののみに限るわけではない。例えば、ある国家が政治的に国民を統一するため攻撃的態度にでるような場合も、実質的・具体的な利益のためだといふことができる。さらにその利益が民衆全体のためのものである必要は存しない。例えばある奴隷貴族が政府を動かして奴隷売買のための在外基地を略取せしめるような場合も、実質的・具体的利益のためだといえる。最後に戦争の実際的原因としての利益は、公然と認められうるか否かも問うところではない。

以上われわれの見たかぎりにおいて、シュンペーターの説明はいちおう納得することができよう。しかし、つぎ

の例解になると、かなり理解に困難をおぼえる。シュンペーターはいう、『これに反して、一部の国民が、戦争の遂行によって財政的利益をうる事ができるからというので、ないしは、民心を国内の難問題から外に逸らさせるために必要だからというので、宣戦の布告を策動するような場合には、ここにいうところの実質的・具体的利益のための攻撃的態度には属さない』（同上）。右の二つの場合は、いづれも戦争の表面に謳われた目的ではない。それらは戦争のかくされた原因であらう。いうまでもなく、戦争の原因はただ一つの原因に還元しうるほど単純ではありえない。それはいろいろな原因が作用して勃発するのであって、一般にかなり複雑な内容をもつものと考えられる。いったい実質的・具体的な利益の有無は、何を基準として判断されるのであらうか。

シュンペーターによると、具体的利益を指摘しただけで事が足りるのは、つぎの三つの条件に適合した場合に限られる。（一）その国民の社会構造・心理状態・境遇などを考慮にいたした上で、明かにそれと看取しうるような具体的利益が現実存すること。（二）その国家の行動が、ある種の犠牲と危険を払ってもなおかつ利益ありと予想され、その利益の実現をはかろうとする場合、（三）その利益が公言されているかどうかに係りなく、実際にその国家の行動の背後における政治的推進力であることが立証されうること、これである。判断の基準は右の通りだとしても、実際においてこれを適用する段になると、判断は容易につかないのではなからうか。われわれはそうした危惧を抱かずにおれない。しかし、シュンペーターにとって重要なのは、『上記の三条件は多くの場合かなえられていないという厳然たる事実』（同上）である。そしてそうした場合だけが、帝國主義の問題たりうるにすぎない。

いづれにせよ、攻撃性それじたいが帝國主義の本質であるというのがシュンペーターの独自の見解なのであって、あらゆる時代、あらゆる型の帝國主義を非合理的なものに還元するところに、彼らしい警拔な着想があるのだ。

『國家それしんのための具體的利益を追及している場合、そして國家がその目的を達するや否や、その攻撃的態度を放棄することが予期される場合には、その利益追及がいかに残忍かつ強烈な仕方で行われようとも、誰あつてそれを帝國主義と呼ぶものはない』(同上)。かようにシュンペーターは、具體的な利益の追及を目的としないというところに決定的な力点をおくのだが、もし帝國主義の概念をあらゆる時代、あらゆる民族ないし國家に妥当するよう、最広義に解釈しようとするのであれば、具體的な利益を追及する場合をも含めて、対外的膨脹政策一般を帝國主義と規定しても、べつに支障は起らないであらうし、またそのように考へている論者もあるのである。しかしシュンペーターはそんなことに傾着せず、むしろ自明のごとく昂然としている、『われわれの定義は、一般の用法に完全に一致しており、また新聞の用法にさえ一致している』(同上)と。

(註) ズルツバッハによると、帝國主義に関する定義は無数にあるけれども、本質的には二つの部類に大別される。第一は經濟的原因を重要視する立場であつて、資本主義とかブルジョア階級とかいう字句がはいっているもの。シュルツェ・ゲーベニッツやカール・レンナーの定義はその代表的事例である。第二は經濟的原因を重要視しない立場であつて、なかならずシュンペーターの定義はその標本的なものであり、彼の流れを汲むハスハーゲンもまたこの部類に属する、という。シュンペーターの定義が異色にとんだものであることは、疑をいれぬ。(W. Stizbach: Nationales Gemeinschaftsgefühl und wirtschaftliches Interesse, 1929, S. 80 ff.; Derselbe, "Imperialismus" in "Handwörterbuch der Soziologie", 1931)

シュンペーターは帝國主義の概念を規定するにあつて、國家の暴力的な膨脹を有力なメルクマールとして挙示している。國家の暴力行為は、とりもなおさず軍による侵略であり、攻撃的戦争であり、武力による他國民の征服である。従つて經濟力による支配、なかならず資本力による支配は、シュンペーターにとって何ら重要な関心事たりえない。たとえ國家の軍事行動を伴わぬにせよ、國家資本ならびに民間資本の侵透を媒介として、經濟的・政治

的に支配従属の關係の成立する場合は、これを帝國主義と見る立場もありうる。現実に戦争に訴えるか否かは、必ずしも問うところではない。こういう見方からすれば、シュンペーターの定義は存外せますぎるという批評がなりたつかもしれない。

三

ともあれ、シュンペーターの問題意識はユニークなものだといつてよい。そしてそれは彼の異色ある研究方法を規定するものでもある。彼は書いている、『われわれの研究方法是單純なものである。つまり典型的だとおもわれる歴史上の突例によつて、帝國主義の生成發展を分析しようというのだ。これらの史実のどの場合においても、一つの共通な基本的特徴が看取されるのであつて、そのためあらゆる時代をつらぬいて帝國主義に関する単一の社會學的問題が提起されてくる。けれどもそれぞれの帝國主義は相互に實質的には異つてゐる。本研究の表題を複數の形にして「諸帝國主義」としたのは、このためにはかならない』（同上）。

一般に世界史の上で特に帝國主義が問題とされるようになったのは、一九世紀末のことであり、従つて典型的な帝國主義は一九世紀末から二〇世紀のはじめにかけて現われたと見るのが、支配的である。ハルガルテンの表現をかりていえば、この期間はまだしく『古典的な帝國主義の時代』であつた。しかるにシュンペーターが一九世紀のイギリスの歴史を分析して引出した結論は、帝國主義は單なる標語たるに止まり、政治の実踐において何ら重要な役割を演じなかつたといふのである（第二章）。いささかひと意表外にでた主張ではあるけれども、実はまさにこの点にこそ、シュンペーターの独得の面目を窺うことができよう。シュンペーターによれば、典型的な帝國主

義はむしろ古代社会に最も純粹な姿で現われる、という。彼は古代より出發して近代の絶対主義にいたる各時代に生起したそれぞれの帝國主義を考察の俎上にのせ、類型の相違にも拘らず、その底に流れる共通的性格を探索し、またその原動力を究明しようとするのである。『われわれはそれらの諸帝國主義のあいだに特徴的な差違を発見すると同時に、それらの諸帝國主義のすべてに——否、もつと近代的な種類の帝國主義にさへ——共通な、一つの基本的特性を見出す。この特性は、それが太古の帝國主義に看取できるという理由だけからしても、近代の經濟的進化の産物ではありえないことがわかる』(同上)。ここでシュンペーターのいおうとするギイ・ポイントは二つある。第一、帝國主義はすでに古代において發現し、けつして近代にいたつてはじめて發現したものでないこと、第二、帝國主義は經濟の發展の所産ではなく、むしろそれ以外のものの結果であること。以上をさらにつきつめていえば、帝國主義は旧時代の社會構造に根ざした社會心理の再現だということに帰着する。すなわち現代の帝國主義を過去の民族的素質・性向の『隔世遺伝』として説明しようとするのがシュンペーターのねらいなのである。

四

シュンペーターはまず古代におけるいくつかの帝國主義をとりあげ、これに対して独自の解釈を加えると同時に、彼自身の理論の証拠のために努める。すなわちエジプトを振出しに、ペルシャ、アッシリヤ、アラビヤなどの諸帝國主義についてつぎつぎに考察を進めるのだが、その一つ一つを点検することは断念して、ここではなかならず重要とおもわれる二つの事例について、要点を紹介することにしよう。すなわち一つは古代ペルシャの帝國主義であり、他は古代アラビヤの帝國主義である。

紀元前六世紀ごろのペルシャにおいては、政治的支配階級は戦争を本務とする職業軍人からなりたっていた。戦争は与えられた環境のもとで、彼等が生存を続けるための唯一の方法であった。そうして征服が進展するにつれ、又民衆は帝国内において特惠的地位を与えられるようになっていった。その結果、暴力づくで膨張しようとする意志が、ひろく人民のあいだから直接もりあがってきた。シュンペーターはこれを『民衆帝國主義』の適例だ、と評している。『武士民族の帝國主義すなわち民衆の帝國主義が史上に現れるのは、ある民族が定住の土地を平和的に利用する仕事に没頭する機会をもつようになる前に、好戦的性質とそれに対応した社会組織とを造りあげたような場合である』(同上)。

シュンペーターは、ペルシャの帝國主義を支配者の側の個人的動機によつて説明することに反対する。そのような説明は、歴史を『ロマンチックな物語で派手に織りなされた世間話』にしてしまふにすぎない、と。同時に彼は、『戦利品や朝貢品のような利益』または『商業的利益』によつて説明することにも反対する。では、反対の論拠はどこにあるのだろうか。第一、被征服民族の私有地をペルシャ人に移譲させるようなことをしなかったこと、第二、被征服民族の宗教や言語や経済生活を害うようなことをしなかったこと、第三、被征服国の指導者たちがペルシャの貴族に列せられた事例の多いこと、等々。

なるほどこれらの事實は、歴史の示すところであらう。だが、シュンペーター自身も認めるように、ペルシャ王は被征服国の國王になつたり、被征服国に朝貢を命じたり、軍事的負担を課したりしたことも、たしかな事實である。してみれば、こうした利益がペルシャの膨脹政策と無関係であつたとは、いひきれぬであらう。しかしシュンペーターによれば、『たとへ具体的利益をえたとしても、それは勝利——それ自体のために尊重されるところの——

の表章としての性質をもったものであって、その具体的利益を目標として求め、かつ搾取するということではなかった』（第三章）。つまり原因ではなくて結果だという説明なのだが、この種の説明は果して充分の説得力をもつかどうか、疑わしくおもえる。

われわれはつぎにアラブ帝国主義に関するシュンペーターの説明をきこう。それは彼じしんの語るところによると、『現代への橋渡しに役立つような』事例だそうだから。アラビヤ人は本来的に武士タイプの馬上遊牧民であつた。この本質は、文化や社会組織がいろいろ変化しても、変ることなくつづいた。馬上遊牧民ぐらい環境の変化に適応することの遅く、また困難なものはない。この種の民族は自活することができない。それであちらこちらに定住して農業や商業を営む住民たちを組織的に搾取する支配階級をなしていた。アラビヤ人社会の内部構造は、徹底的に民主主義的なものであつた。民族のすべての成員が政治的比重をもち、またすべての政治的表現が民衆ぜんたいの中から盛り上つていた。アラビヤ人は自由選挙による族長ないし藩主を頭目とするいくつかの部族に分れ、部族と部族はたがいにくるく結びついていた。これらの部族のもとで血縁によるつながりができ、それが中枢的共同体を構成していた。

七世紀のはじめごろから一種の反動として社会改革ないし革命の運動がおこつた。中心人物はいうまでもなくマホメットである。昔ながらの單純さを守ること、貧富の懸隔をなくすこと、利潤の追求を自制することなどが、その信仰箇条であつた。しかるにこうした教義によって脅威を感じた人々は、マホメットを追放した。その結果、マホメットはかかる不信仰者を折伏せんがために立ち上ることになった。かくて実行の闘争組織が結成され、靈的交渉という要素が、兵士の規律強化の手段として役立つた。メッカの奪取に成功してからのちは、国境を越えて進出

するようになり、多くの異民族を征服するようになった。つまり、『彼等の社会組織は戦争を必要としていたのである。彼等の社会組織は、勝利に終る戦争をするのでなければ、壊滅するほかない運命をもっていた。そればかりでなく、戦争は社会構成員の正常な職業であつた』(同上)。しかし、とシュンペーターはいうのである。『ゆたかな背景をもつた他国の新しい環境に心がひかれるようになるや否や、とりわけアラビヤ人が土地を手に入れて、そこに住みつくようになるや否や、戦争への衝動は消えうせ、ユルドバやカイロやバグダットのような文化的中心地が発展し、もっとも有能な国民層の精力が戦争いがないの目的にそらされた』(同上)。

こうしたアラブ帝國主義は、宗教的色彩をおびている点に一つの特色をもつが、これをもつて宗教戦争と見ることにシュンペーターは断乎として反対する。『闘争は信仰の伝播のために必要であつたのではなく、アラビヤ人の支配を拔げるために必要なのであつた。戦争や征服は、戦争や征服そのもののために必要であつたのだ』と(第三章)。しかし、あの熱烈な狂信主義の魔力を全然ぬきにしてアラブ帝國主義の真髓を捉えることは、とうてい不可能なのではなからうか。

アラブ帝國主義は宗教的色彩を有する点に一つの特色をもつが、もう一つの特色として、シュンペーターはそれがやはり一種の民衆的帝國主義であつたことを強調している。だが、民衆的帝國主義 (Völkimperialisismus; people's imperialism) とはいつた何の意味するのであろうか。この点に関する理解をふかめるためには、シュンペーターに従つて古代ゲルマンの歴史を追跡しなければならぬ。五世紀ごろに展開されたフランク族の膨脹、メロヴィンガ王朝期の帝國主義がすなわちそれだ。彼は書いている。『このような成功がたび重るごとに、国王の権力は増大した。また広大な地域を取得するにつれ、……さらに教会に対する支配力を獲得するにつれ、そして

最後には国王直屬の忠誠な武士や戦争利得者の数が増加するにつれ、国王の権力もまた増大した。それでもなお全民衆……がこの帝国主義に参与していたのだ。そしてここにいる民衆とは最高層のものだけでなく、……また特殊の武士階級だけのものでもなかった。国王たちは「有力者」の承認を必要とするよりも、むしろより広い階層の承認を必要としていた。国王たち自身の権力は、民衆の支持のない政策を強行しうるほど無限のものである、確固たるものでもなかった。……戦争と征服とを強行しようとする帝国主義的意志が人民のものであったということ、そして国王がこの人民の帝国主義的意志の指導者ないしは、代弁者以外の何ものでもなかったということは、否定しがたいところである』（第三章、傍点は引用者）。

民衆的帝国主義の何たるかは、以上の引用によつてはば明かとなった。かようにメロヴィンガ王朝期の帝国主義が民衆的性格をもっていたのに反して、カロリング王朝期におけるカール大帝の帝国主義は民衆的性格をもっていなかった、とシュンペーターは説く。彼のいうところによると、民衆は国王の帝国主義をのがれて、地方の領主たちの保護に縋るようになり、カール大帝の帝国主義のおもな支柱をなしたものは、直屬の家臣団だけであつた。そして民衆が反帝国主義的であつたことが、カール大帝のなくなったあと、帝国主義の挫折をきたした原因であつた、等々。

五

シュンペーターは上述のごとく考察を進めたのち、自己の診断に疑問をいだかせるようなケースのあることを意識し、その弁明のため特に二つの事例に言及する。

第一の事例、それはアレキサンダー大王の帝國主義である。この場合は、征服につぐに征服をもつてし、かくして新しい世界帝國を建設するといふのではなくて、既存の帝國の中央權力を一撃のもとに打倒し、それを勝利者が自分の掌中におさめたにすぎない。侵略の原動力はギリシャ文化でもなければ、ギリシャの商業利益でもなかった。國家の帝國主義でもなければ、民衆の帝國主義でもなかった。侵略的であつたのは、大帝國という獲物を眼前に見出した一箇の武人にすぎない。そのかぎりでは『個人的帝國主義』とでもいふべきものであつて、シュンペーターの関心の対象たるにあたしいない。それはシーザーやナポレオンのように、『その權威が軍事的事業と共に高まり、その地位を保持するために絶えず新しい戰勝を必要とするところの政治家の帝國主義』に類する、とシュンペーターは説く。

しかし、これらの武將はいずれもその輩下に有力な職業的軍人をもち、彼等は重要な社會層を形づくつていたのではないか。そのうえ人民の熱烈な支持をさかちえていたのではないか。これを單なる『個人的帝國主義』として別扱いにすることは、はたして正しいであろうか。そのような態度は、それこそ歴史をロマンチックな物語にすりかえることになりはしないであろうか。問題はむしろ、エリートと大衆の關係にあるのであり、個人の独裁が民族ないし國民を動かし、直接であれ間接であれ、協力的ないし支持を獲得するのは何故かといふところにあるであらう。

第二の事例はローマの帝國主義である。『ローマ帝國の政策は』とシュンペーターは書いてゐる、『直接には自己保存だけを目的としたものであつて、われわれの定義の帝國主義には属さない』(同上)と。しかしポエニ戰役からアウグスツヌスにいたるまでの期間は、際限のない征服慾の時代であつたから、ある意味で帝國主義の時代であ

ったということは、彼も認めるのである。シュンペーターによると、この時代は表面は平和を念願するように見せながら、その実必ず戦争にもって行くという政策、すなわち絶えず戦争を準備し、お節介な干渉を企て、戦争を正當化するためにはあらゆる口実を設けた。しかし戦争の具体的目的は何かという点になると、容易に判断がつかない。ローマ国民は戦士民族ではなかったし、初期のローマは武断的独裁国ないし特殊の軍事的性向をもった貴族国家でもなかった。そこに厄介な問題がある。残された道はただ一つしかない。それは『国内における階級的利害關係』を吟味することだ、とシュンペーターはいふ。かくて彼の引き出した結論はこうである。

奴隸労働を大規模につかつて経営した当時の大土地所有制は、公有地の占拠と農民所有地の略奪との上に立っていたので、農地を追われた農民たちは、ローマ市に流れこみ、その結果、土地をもたぬ兵士たちが発生した。このようにして戦争政策の必要が生れたのである。ラテンディウムの地主たちは、戦争によって自分たちの必要とする奴隸を安価に手にいれる便宜をえるばかりでなく、むしろ自分たちの社会的・經濟的地位を安定させるために侵略戦争を必要としたのであった。つまり農地改革をするか、戦争をするか、二者択一に迫られた彼等は、農地改革を求める革命の脅威から免れるために、侵略戦争に訴えざるをえなかったのである。彼等の安全を保障するものは、国民的栄光だけであり、彼等にとって唯一の政治上の仕事は、ローマ市民の窺知しえないような国家の外交問題を利用することであった。『実際に脅かされているのが階級的利益であるときに、支配階級はいつも国家が危機に瀕しているといひだす傾向がある』（同上）。むしろその周辺には、戦争に利害關係をもつあらゆる種類の集團があった。しかし『彼等は帝國主義的傾向の結果的存在であつて、原因ではなかつた』。もう一つ帝國主義の結果と見るべき現象は、征服政策のいわば累積的效果である。つまり征服政策は、必ずより以上の征服へと駆りたてるよ

うな事態をひき起すということだ。途中でブレーキをかけようにもかけようがない。ほとんど自動的に当初の希望や抱負を乗りこえて、意外な帰結を生んでしまったのであった。このように説ききたったシュンペーターは、ローマの場合を『内政的事情に基礎をもち、階級構造から生れてた帝國主義』の最も適切な例証だと称しているのだが、同時にそれはシュンペーターの推論の進め方の特色を如実に示す絶好の標本である、といつてよからう。

六

以上教節にわたつてわれわれの考察したところは、シュンペーターの帝國主義論のいわば序説的部分にあたる。にも拘らず、彼がユニークな特色をもち、斬新な手法を駆使していることの片鱗は、何びとも感得しうるところであるに相違ない。一読たしかに明快である。しかし再読かならずしもそうだとのみはいきれぬ何物かを、それは含んでいる。偏見であり、独断であるときめつけるにはあまりに巧緻であるけれども、それについて一種の抵抗を感ぜずにはおれないであらう。シュンペーターにあつては、経済は合理的なもの、平和愛好的なもの、軍事は非合理的なもの、戦争愛好的なものという考えが、いつも付きまといてゐるようである。彼は経済と軍事を完全に切りはなす。軍事は軍事、経済は経済である。そのかぎりでは、とかく一面的になりやすい危険をもつ。軍事機構を支える経済の分析もなければ、軍事行動の誘因としての経済の役割に対する考察も充分に施されてはいない。経済生活に没頭するものは、帝國主義にまったく無関心のように説かれてゐる。歴史の夾雑物は簡単なシュエーマの飾によつて洗ひおとされ、すべてはいとも鮮やかに処理される。しかし問題は、それが一種の公式主義に陥るおそれがないかどうかにある。専門の歴史家でないものが生半可な議論をもてあそぶことは、もとより禁物であるが、古代の帝國主

義においても、経済が大きな要因の一つであったことは、否定しがたい事実ではなかったか。

ただ一例だけをあげよう。マックス・ウェーバーは、ある政治的共同体の関与者たる以上、大衆といえども、個々の階層と同じように、経済的にはつねに平和主義的な利害関係をもつとはかぎらないことを指摘したのち、つぎのように書いている。『アテネの市民は、経済的には戦争で暮しをたてた。戦争は市民に給料をもたらし、勝利のあかつきには〔属国〕人民の貢納をもたしたのである。この貢納は人民議会、公判審理および公けの祭典への出席手当というほとんど偽装を施されぬ形のままで、事実上、完全市民のあいだに分配された。アテネでは、帝国主義的な政策や勢力への利害関係はどの完全市民にも納得がいったのである』。同じウェーバーはローマの海外膨脹が史上稀にみる壮大な規模で行われたことを回想し、これに『帝国主義的資本主義』という名称を与えている。名称の当否はしばらく別として、その意味するところは租税請負人、国家債権者、国家の御用商人、国家によって特権を与えられた海外貿易資本家や植民地資本家の資本主義的利害関心の重要性である。『彼等の利潤のチャンスはてつとてつび政治的強制権力の、それも膨脹をめざす強制権力の直接的搾取にもとづいている。政治共同体の側からする海外「植民地」の獲得は、住民を強制的に奴隷化するか、さもなければ土地にしばりつけることによって、彼等を栽植企業労働力として搾取し、さらにこれらの植民地との貿易やおそらくは海外貿易の他の部分を力ずくで独占するためのおびただしい利得のチャンスとを、資本主義的利害関係者に与えるのである……』(Max Weber,

Wirtschaft und Gesellschaft, G.D. S. III Abt. 1925 S. 621-626. 英島朗訳『権力と支配』昭和二九年一九三二頁以下)